

## トマス・ヴィア・ベインの父 (1803-1848)

笠井 勝子

### Thomas Vere Bayne's Father (1803-1848)

Katsuko Kasai

#### I はじめに

チャールズ・ドジスン(ルイス・キャロル)と彼の終生の友トマス・ヴィア・ベインは、ドジスンの生地ダズベリで少年時代に出会った。当時チェシャ州の東端のダズベリからは東へ7キロほど離れたランカスターのウォリントンの町に住んでいたベイン少年の父はドジスンの父と同じオクスフォード大学の出身で聖職資格を持ち、ウォリントン・グラマー・スクールの校長職の傍ら、日曜日には教会の礼拝で牧師の補佐をおこない、必要とあらばダズベリ教区教会まで出かけて、その礼拝も手伝った。ダズベリ教会の牧師には息子のトマスより二つ年下の少年がいた。チャールズ・ドジスンである。

チャールズが11才の1843年には父の転任によりドジスン一家は北のヨークシャーのクロフトへ移っていった<sup>1</sup>。少年だったドジスンとベインが再会するのはオクスフォードでクライスト・チャーチ・コレッジの学部生となってからである。以後二人の友情は途絶えることがなく、トマス・ヴィア・ベインはドジスンの日記にたびたび出てくる友人である。ベインの母<sup>2</sup>も息子と共にクロフトのドジスンの家族を訪ねたことが1862年9月28日のドジスンの日記に記録されている<sup>3</sup>。

ドジスンはこの日、父が牧師をしているクロフトの聖ペテロ教会で朝の礼拝に初めて聖書の朗読をおこない、ベインは説教をした。ベイン母子は9月24日からクロフトに滞在していた。現存するドジスンの日記にベインの母が出てくるのは、これが最初である。同年はこれきりで、ベイン夫人が次にドジスンの日記に現れるのは、翌年1863年6月16日である<sup>4</sup>。この日は皇太子夫妻がクライスト・チャーチを訪れ、中庭で志願兵を表彰する様子をドジスンはベインの部屋に行き窓から眺めていた。ベインの部屋は学寮の中庭に面した三階にあった。表彰式が終るとドジスンはベインの母を連れてシュルドニアン講堂へ向かった。ベインはオクスフォード大学の学監をしていたために、先にシュルドニアン講堂へ行っていた。講堂では大学全体で皇太子夫妻の歓迎式が催された。

ベインの母について日記では、1864年、65年、66年それぞれ四回、ロンドンに住むベインの母をドジスンは訪ねている。例外的にベインの母がクライスト・チャーチを訪ねてきた66年6月13日——この日は大学創立記念日で祝祭を見るためにベインの母はオクスフォードを訪ねた——を別にすれば、あとはドジスンがロンドンに出たときに訪れて、芝居に連れ出したり絵画展に一緒に行ってい

る<sup>5</sup>。1873年9月11日は、ベインとその母がギルフォードに住むドジスの姉妹の家チェスナッツへ来た<sup>6</sup>。

ダーズベリとウォリントンでの少年時代以後、クライスト・チャーチでドジスンとベインが再会するまでに、トマス・ヴィア・ベインの家族はどうしていたであろうか。本稿では、ウォリントンにおけるベインの父、校長トマス・ヴィア・ベインと、彼が奉職した学校の歴史、その校史の一頁を飾るベイン校長への評価を明らかにしたい。参照した資料は、1883年11月に『ウォリントン・ガーディアン紙』に掲載されたウィリアム・ビーモントによる「ウォリントン・グラマー・スクールの校長たち」と題する記事、および創立450年を記念して1976年に出版されたH. リーヴズリー著の『ボタラー・グラマー・スクール』である。

ドジスの家族がダーズベリを離れたのとはほぼ時を同じくして、ベインの父はウォリントン・グラマー・スクールの校長を辞し、牧師としてランカスターのプロートンにあるセント・ジョン教会に赴任した。キャロルの日記にはベインの父については一度も言及がない。ベインの母がロンドンに在住した頃には、おそらくトマス・ヴィア・ベイン師は亡くなっていたのではないかと推測される。二人が離婚して母親だけがロンドンにいたとすれば、ジョージ・ワッツと離婚したエレン・テリーにドジスは会おうとしなかったことから考えて、ドジスはベインの母を訪ねることをしなかった筈である。ダーズベリとウォリントンというドジスンにとって昔懐かしい土地で、まだ母のフランシス・ジェインが生きていた頃に家族で親しく付き合ったベイン家の人、とりわけその母親に対して、ドジスは大学に入った19才の時に逝った亡き母を重ね思いを寄せて訪ねていたのではないか。牧師の父をとおして両家にはダーズベリ

時代からの古い付き合いがあった。

以下では友人トマス・ヴィア・ベインと区別するために、ベインの父をベイン師、あるいはベイン校長、という。

トマス・ヴィア・ベイン師は役人の息子として1803年10月25日にオクスフォードで生まれた。オクスフォード大学ジーザス・コレッジに学び、1823年の第一学期に人文学の優等試験で第2級を取得した文学修士である。1828年に25才の若さでウォリントン・グラマー・スクールに校長として就任したとき、この学校は創立以来かつてない深刻な事態に直面していた。ベイン師について語る前に彼が着任する当時の学校の状況をみるために、H. リーヴズリーの*Boteler Grammar School, Warrington, 1526-1976*から学校の歴史と概略を紹介する。

### 1) ボタラー・グラマー・スクール創立

ウォリントン・グラマー・スクールの前身は創立者の名前を取ってボタラー・グラマー・スクールといった。創立は1526年で1976年には創立450年を迎え、また現在の名称はサー・トマス・ボタラー英国国教会高等学校に変わっているが、創立者ボタラーの名前は今日も残っている<sup>7</sup>。

グラマー・スクールの起源は中世にある。当時裕福な者は死後に自分の冥福を祈ってもらおうと土地や財産を教会の司祭に遺贈することがおこなわれていた。遺贈を受けた司祭は当人の霊を慰めるために祈りを捧げる。しかしそれだけでは大した手間にもならなかったところから、やがて祈願だけに止まらず、慈善学校を建て、地域の児童の教育に役立たせるということが始まった。こうした慈善学校の他に、同業組合が設立した学校もあった。マーチャント・テイラーズ・スクールがその一例で、そこでも司祭が教えていた。学校の

種類には初等学校とグラマー・スクールがあり、ボタラー・グラマー・スクールは、当初は両方の性格を兼ね備えていた。

中世も後半のルネサンス期に入ると古代ギリシャ、ローマの文学を読みギリシャ人、ローマ人の考え方や生き方を彼らから学ぶことに関心が集まった。特にチューダー時代(1485-1603)には、グラマー・スクールが数多く設立されている。創立された学校の主たるねらいは、ラテン語文法とギリシャ語文法を(それにできれば数学も)教えて、古典の文学が読めるようにすることであった。

前述のようにジェントリ階級には、遺言のなかで地域の児童の教育に資するグラマー・スクールを設立するために財産を遺贈することが流行になっていた。このような時代にあつてサー・トマス・ボタラーは、後継者に対して、ウォリントンの児童のためになるような無料のグラマー・スクールを創立することを遺言した。

## II サー・トマス・ボタラーの生涯と学校設立

ボタラーの系譜を紹介しよう。ボタラーあるいはバトラー一族は、ピンサナ家の子孫であった。ピンサナ家の名前が初めてウォリントンに現れるのは、ウィリアム・ピンサナがマシュー・ドゥ・ヴィラーズの跡継ぎ娘と結婚してウォリントンにある広い地所に関わるようになった時からである。マシュー・ドゥ・ヴィラーズはウォリントンに荘園と領地を所有したノルマン人の二代目であった。一族の名前はウィリアム征服王の時代に遡って1086年の土地台帳に載っている。

中世の時代のピンサナ(あるいはバトラー)は著名で榮譽ある名前とみなされた。ボタラーの名前を持つ最初のピンサナは1160年頃

に生まれたリチャード・ピンサナの息子で第五代男爵ヴィルヘルムズ・ル・ボタラーである。彼は1176年にウォリントンの広い土地を相続した。ウォリントン・グラマー・スクールの前身であるボタラー・グラマー・スクールを創設するサー・トマス・ボタラーは、その第十五代男爵である。1461年にビュージーで生まれた彼は、エドワード四世、エドワード五世、リチャード三世、ヘンリー七世ら乱世の時代を賢明に処した。それはちょうどバラ戦争の時期で、名のある者にとっては波瀾の時代であった。時代の嵐をくぐり、周辺地域でも幾多の争乱に遭遇してきたボタラーは、1520年に現世に所持するものを手放すことにした。敬虔な信仰により教会を援助してきた彼は、リム・チャーチの尖塔復興の基金に気前よく寄付をし、また学校設立のために財産の提供を遺言状の中に記した。亡くなる前の1522年4月22日には、前もって取得しておいたティルズリーとウォリントンの土地を学校の基本財産にすることを遺言書の追加条項として書き入れた。

21世紀の現在この学校は「サー・トマス・ボタラー-英国国教会高等学校」という名称に変わっている。創立以来変遷を繰り返し名称も幾度か変わった。最初の学校「ボタラー・フリー・グラマー・スクール」は、サー・トマスの遺言に明記されたとおり、無料の教育機関であった。資金は、サー・トマスの財産から金貨で五百マルクが土地の購入のために取り置かれ、その土地から上がる地代の10ポンドを「ウォリントンに永久的に無料のグラマー・スクールを創設してこれを維持していく」ためにあてるものとされた。

受託者たちが遺言に従って学校設立に着手したのは、1526年4月16日で、サー・トマスの死後四年目である。設立の狙いは、「この学校によって、子弟が古典語の文法を学び、学習によって全能の神を一層よく知るように

なる」ことで、設立の主旨と運営の方針を盛り込んで校則が作られた。校長については、「正直で、思慮分別のある司祭で古典語の文法の知識を十分に身につけている人物」を任用する、「バグ・レイン」の家を校長が専用に使用する、校長には、「ウォリントンの学校長印というものを作り、持たせる」、「その印章は安全に保管し、代々校長に伝える」ことという規定が作られた。しかしこうした命令事項にもかかわらず校長印は紛失してそれを押印した文書は、現在見つかっていない。遺言に従って学校では生徒たちから授業料を取ることが禁じられた。但し、年四回の祝賀の日には四ペニーを集めて、全生徒に飲み物を出すことは例外として認めていた。生徒は「食事の肉を切るナイフ以外には、短剣、腰刀、その他人を傷つけるいかなる武器も」携帯してはならなかった。

校長には助手を雇うことが認められず、年長の生徒は年少の生徒に、A, B, C, と数の初歩を教えて、(ラテン語)文法の学習に入るまでの手助けをすることとされた。ラテン語を習い12カ月経つと、生徒たちは「いつ、いかなる所においても」生徒同士で話すのに、ラテン語を使い英語は使わないこと、と定められた。遊びについては、双六やトランプ、その他いかなる違法なゲームも行ってはならない。生徒は校長を手伝い、「他の生徒の間違いを直してやる」こと、「校長に手向かうようなことをすれば、永久に放校とする」、但し、校長が「その生徒を留めておくことをよしとする場合は、別である」、と定めてあった。

生徒は全員「日曜、水曜、金曜日には教区教会の周りと中とを二人づつ並んで、連禱と応答聖歌を歌いながら行進する」こと、冬の期間は毎朝「六時から七時」まで教会に出席し、その後直ちに学校へ行き、午後五時まで下校してはならない。但し、「校長の判断で、

場合によっては四時に下校する」ことができた。夏の朝は五時から六時まで教会に出席すること、創立者の命日である4月27日には毎年特別礼拝を教区教会でおこない、「費用は全て校長の負担で賄うこと」と定められた。

校長として任命を受けた「正直な祭司」は、当然忙しく働くことを期待された。そのうえ、暇をみて学校の財産と土地を管理することも務めであった。校長の給与は1年十ポンドと定められ、学校の収入が十ポンドを超える場合は、その差額を三つの錠前がついた「箱」に納めることになっていた。

### Ⅲ 創立後

創立当初の「ボタラー・フリー・グラマー・スクール」ではサー・トマスの希望どおり、生徒は喜んで勉学に励んだ。生徒たちには、「品行において良き模範となり、善行をおこない、能力を活かし悪を退ける」ことが期待された。しかし、受託者の側は怠惰を貪っていた。曾孫のエドワード・ボタラーの代にウェイクフィールドという校長がいて、校長と受託者とは互いに学校の資金と土地の一部で私腹を肥やし、楽しみごとに費やした。

利益を守ることを第一に考えるべき者によって、学校の財産は略奪されていたのである。ウェイクフィールドは1605年に死に、ウォリントンに埋葬されたが、その死は早すぎたとは少しも言えない。このとき、学校の財産は壊滅状態にあった。

1602年に弁護士サー・ピーター・ウォバトンは、学校の失われた財産を回収する仕事に乗り出した。彼はランカスター公領の裁判所に告訴状を提出し、新しい受託者を任命するように求めた。裁判所は1607年に判決を

下した。

判決の結果を受けて、1608年に新しい再出発の趣旨が書き上げられ、2年後の1610年に慈善を目的とする委任状ができた。そこには次のことが書いてある。校長は、「常にこの学校の校長であることを自覚し、学校を良好に誤りなく維持していくこと、生徒には無料で教えること、生徒の勉学をよくみてやること、学校のある日は、午前中に少なくとも三時間、午後最低三時間は学校に在り、毎朝、生徒と共に祈りの集りを持ち、創立者で勲爵士のサー・トマス・ボタラーに働きかけてくださった神への感謝を捧げること、また生徒たちが下校する前にも同様の祈りを行うこと」と定められた。

サー・ピーター・ウォバトンは、その善行に加えてチェスターにある土地から上がる毎年5ポンドの地代を学校に寄付した。サー・ピーターを補佐していたトマス・ティルズリーも五ポンドを上限として、校舎改修のために寄付をした。1863年にできた建物のホールにはサー・ピーター・ウォバトンとトマス・アイアランドの紋章が刻まれていた。トマス・アイアランドはサー・ピーターが起した大法院への訴訟の際に、実はサー・ピーターに反対した人物であった。校舎の三つの建物には「ウォバトン」、「アイアランド」、「ティルズリー」の名前がついていたが、それぞれサー・ピーター・ウォバトン、トマス・アイアランド、トマス・ティルズリーから付けたものであった。

#### IV ベイン師以前の220年(1608-1828)

1608年の再出発後、ボタラー・フリー・グラマー・スクールは優れた校長を次々と迎えて発展するかと思われた。オクスフォードのブレイズノーズ・コレッジ出身の校長が数

名続いた。ブレイズノーズと学校との繋がり  
は創立者の時代以来継続した。創立者サー・トマスは若い時にマンチェスター・グラマー・スクールを創設したヒュー・オールドハム司教に会っている。またリンカン・コレッジ出身のウィリアム・スミス司教は1509年にブレイズノーズを創立したメンバーの一人で、同じブレイズノーズの創立者のなかにサー・トマス・ボタラーの遺言執行人の一人であったサー・リチャード・サットンがいた。

学校の財源には不安があった。学校財産の土地の多くは長期の賃貸契約で貸し出されていたが、契約期が切れると、小作人たちは昔のままの賃料で更新することを望んだ。1627年から68年の間、校長職にあったネイサン・アッシュワース師は小作人を相手に訴訟手続きを取ると言い出し、結果としては以前より高い賃料で契約を更新させるのに成功した。

1687年には、ウィガン・グラマー・スクールの校長サミュエル・ショー師が「ウォリントンの無料学校を教える許可書」を与えられた。ショーは学校の建物および校内を改築、整備して、自分の名前とその年の1688を入れた銘版を付けさせた。建物を改善した以外にもショーは学校の受託者の同意を得たうえで、自らの責任において訴訟を起し、それまでに慈善の名目で失われた学校の土地を取り戻す努力をし長年の争いの末、土地は学校に戻ってきた。ショー校長は1691年にウォリントンの教会区牧師になった。校長職と牧師職とを兼ねたのはショーが最初である。彼はまた海外のプロテスタント共同体を援助するための寄付集めにも積極的に働いた。ショー師はランカシャーのために四人いるKing's Preachersの一人であった<sup>8</sup>。1707年に彼はストラトフォード司教に働きかけてウォリントンの聖職義援金を設立した。また1709年にはリム（ウォリントンから東南東に9キロのところ、チェシャ州オルトリンカムの一教区）

のピーター・リーと共に、ウォリントンにホーリー・トリニティ教会を作るために働いた。サミュエル・ショーは31年間の活動の後、1718年に68才で没し、教区教会の内陣に埋葬された。

ボタラー・フリー・グラマー・スクールはショーの死後、ジョン・タトロック師が約1年間校長職を代行し、1719年にトマス・ハイワード師が引きついだ。ハイワードは1695年にウォリントンに生まれ、この学校の卒業生であった。1716年にオクスフォードのブレイズノーズ・コレッジを卒業し、翌年結婚した。1719年に文学修士を取得すると、直ちに校長として仕事を始めた。しかし、校長職の正式な承認が下りたのは1720年である。彼は1722年から31年までガースタンの牧師も務めていた。また1728年には、サンキーにある建て替えられたチャペルの牧師をも兼ねた。ハイワード校長は多くの優秀な生徒を育てた。ある卒業生はハイワード校長について「有能だが、厳格な教師。優れた学者、そして非常に有用なる人物」と語った。ハイワード校長は37年間在職し、1757年に没した。

次の校長に任命されたのは、グレイト・クロスビーにあるマーチャント・テイラーズ・スクールの助教師のエドワード・オーエン師であった。彼はハイワード師を引き継ぐ形でサンキーの副牧師も引き受けた。オーエン師の見た学校はひどい状態で、建物は残骸の様相を呈し屋根は今にも落ちかかり、床や壁は泥土であった。オーエン校長はこれらを直ちに修理させ、付属の建物を食堂と寝室に作り替え、寄宿生を受け入れる建物に変えた。寄宿生を入れたのは学校の歴史上、初めてのことであった。さらにオーエン師は学校の傍をラッチフォードからウィンウィックへ通じるローマ道路が通っているのを遮断して、その上に自分の馬小屋を建てた。オーエン校長

のもとで学校は「無料の優秀な学校」という評価を得て、しばらくの間はかなり有名になった。遠来の寄宿生もあり、なかには西インド諸島出身の生徒もいた。多くの卒業生が社会に出て名を成した。ブレイズノーズ・コレッジの大学のフェローになったものが三人出た。オーエン校長は優れた古典語学者であり多数の著作を出版している。1765年には創立5年目で公立図書館としては英国初のウォリントン図書館の館長に選任された。

オーエン校長は同じウォリントンにあるウォリントン学院に対して敵対意識をもっていたようであるが、それは相手が非国教会の学校であったことや、自分の学校のライバルという見方からきていたものと考えられる。

オーエン校長は校長職の他にウォリントンの教区教会碌を、アサトン領地の跡取り娘と結婚して教区教会のパトロンになったロバート・ギリムの次男のリチャード・ギリムから1767年に与えられた。校長職は再び牧師職を兼ねるものになった。知らせを受けたオーエン校長に言わせれば、「パトロンは良き校長をだめにして、無関心な牧師を作る」ことになった。以後オーエン師は教区教会の本陣の建て直しに取り掛かる。この本陣は1859年に取り壊されるまで残っていた。

50年間校長を務めたオーエン師は独身のまま1807年に79才で没した。彼は希望していたように「ウォリントン教会本陣にある、優れた前校長サミュエル・ショーの墓の南側」に埋葬されている。ギルバート・ウェイクフィールドは、オーエン師について「校長先生は非常に上品な態度と、非のうちどころの無い、正直で情深い心を持っていた。」

オーエンの没後、オクスフォードのブレイズノーズ・コレッジ出身のロバート・アサトン・ローストン師がリルフォード卿の指名によって校長に決まった。卿は学校のパトロンで、また教会のパトロンのH.M.アサトン

嬢と結婚していた。アサトン家は新校長で新任牧師の指名を受けたローストーンとは縁戚関係があった。新校長ローストーンはまったくやる気がなく、ウィリアム・ボードマン師を自分の「助教師」として任命し学校運営の一切を任せて、校長用の住宅を自由に使用させ、校長職を名目だけのものとしてしまった。これに対してウォリントンの人々は抗議行動を起した。前校長オーエンの晩年に既に学校が衰退の兆しをみせていたのを懸念した町の主だった人々数名が費用を出して、1810年に大法院法廷でリルフォード卿が学校のパトロンであることを理由に主張している権利(校長を任命する権利があるものと主張して、縁故のあるローストーン師を任命したこと)を吟味してもらうために、また校長と教会区牧師の職をかねることはできない、という声明を出してもらうために行動を起した。大法院は判決を下すまでに4年の歳月がかかった。判決は、「リルフォード卿は校長を任命する資格あり。校長は教会区牧師を兼務できない。」というものであった。翌1815年にウィリアム・ボードマンが校長に任命された。彼は事実上過去7年間にわたりこの学校を管理、運営してきた。ボードマンは学問の世界には珍しいタイプで、知性と奇行を併せ持つ人であった。彼の話は術学的、服装は奇抜であった。あるとき彼はある会合の席に靴の踵まで届く長いフロックコートを着て茶色の半鬘を付け緑色のガラスを入れたゴーグル状の眼鏡、それに目を保護するための濃い緑色の眼廂を付けて現れた。生徒に対しては身体に懲罰を加える効果を確信していたヴァルピー博士の経営する学校から来たボードマン校長はその習慣が抜けなかったためにAjaceo flagelliferi ——アジャシオ出身の鞭持ちの一人——と、W. ビーモントに評された。体罰による効果を信じて、ジョン・ブースという生徒を「直接矯正していること」を訴えられた

ことがあったが、訴えは退けられた。

ボードマン校長は一つだけ良いことをした。1822年に正式に生徒の入学者台帳を付け始めたことである。(入学者台帳の導入に関して、ウィリアム・ビーモントは次の校長トマス・ヴィア・ペイン師が始めたことである、と記している。) 苦情が絶えなくなりボードマン校長はやっと1828年になって辞職を考えた。しかしそのための条件は、次の校長が受け取る報酬から自分に対して400ポンドの一時金と毎年150ポンドとを与えること、というものであった。(学校の受託者たちはボードマンを追い出すことに苦心した挙げ句にこの悪辣な取り引きに応じてしまった。) 彼は妻と息子、娘を連れてセーヌ川の河口のルアール川の対岸にあるオルフルに引退し、1846年にそこで死んだ。

ボードマン校長の退任により、後援者であるリルフォード卿は多数の志願者のなかから校長に最も適格な人物として、トマス・ヴィア・ペイン師を選び出した。ペインが赴任するまでのサー・トマス・ボタラー校は以上の経緯を辿ってきていた。学校の名称はこのとき、ウォリントン・グラマー・スクールとなっていた<sup>9</sup>。

## V 校長トマス・ヴィア・ペイン

トマス・ヴィア・ペイン師は若くしてグラマー・スクールの校長の責務を負った。その人柄のせいかわりに心酔した人は少なくなかったようだ。その一人、サー・ウィリアム・ビーモントが1883年に『ウォリントン・ガーディアン紙』に寄せた*Masters of The Warrington Grammar School* は、歴代の校長について語るなかで、ペインに割いた頁数は他をはるかに上回って、2段組で正味4頁に及ぶ。この

記事が書かれたのは、ペインが世を去ってから35年後で、執筆者ビーモント(1797-1889)は86才、ペインの教え子でビーモントの一人息子のウィリアム・ジョンが早世してから15年が経っていた。行間には、校長と息子に対する老ビーモントの愛惜の気持ちが滲んでいる。以下は、*Warrington Guardian November 1883* からペイン師に関する記述を概略する。

## V ビーモントが記した校長トマス・ヴィ ア・ペインと教え子たち

新しい校長は前任者のボードマンとはまったく対照的な人物で町の人々から好意的に迎えられた。彼が大学卒業時には優秀な成績で深い学識を持つことは人の知るところとなっていたが、前校長と異なる点は、自分の知識をひけらかすようなところは一切なく、また誰に対しても人を寄せつけないようなところがまったく見られなかった。校長が地元で溶け込んでいく姿に、周囲の人々からは積極的な支持が集まった。

校長の住宅を改造し新校舎を建築し、新しい校長を迎えて学校が再開したのは、1828年のことである。ペイン校長の保護の下で生徒数は速やかに前校長時代を上回っていき、間もなく教室の広さは生徒数に比して小さ過ぎるため、1829年には大法官庁裁判所の承認を取って、訴訟のときに裁判所に支払われた拠託金から校舎を増築する費用を出し、校長の家とは別に120人の男子生徒を収容する建物を建設することになった。建物はペイン校長の構想に従って建てられ、装飾の殆どない簡素な作りでイギリスというよりもイタリア風の建築様式になった。この石造りの校舎は、後に校長の家と学校の付属の建物とが取り壊された時には、記念のための銅板画を作り、今日に伝えられている。

ペイン校長が着任した1828年には25人の生徒が入学してきた。ウォリントンの初代市長でウォリントンに関する著作が多いウィリアム・ビーモントによるとこの時からペイン校長は入学者台帳をつけることを始めた。以来、その習慣はずっと今日まで続いている。この入学者台帳によって、その後ウォリントンで、あるいは国の内外において社会に貢献した卒業生や保護者の名前がわかる。サー・トマス・ボタラーが設立した伝統あるこの学校で親子代々にわたり教育を受け、世間で名を成した人物も少なくない。

ペイン校長の時代に入学した生徒について挙げると、校長の就任一年目である1828年にはジョージ・ヒューズが入っている。彼は詩歌に秀でて、1850年には2巻の詩集を出版し、それをウインマリー卿こと当時ウォリントンの名士であったジョン・ウィルスン・パットン氏に捧げた。

ペイン校長は背が高く端正な容姿の紳士で人に接する態度は前任者とは大いに異なることから、自然と人々の尊敬を受けた。これは校長として重要な資質であった。かつてウェストミンスター校の校長ブッシー博士はチャールズ王と教室で話をするときには、チャールズ王の方が自分よりも偉いと生徒たちから思われるのを恐れて、帽子を取らなかったというエピソードがある。ペイン校長は校長として当然の敬意が払われることは求めたが、生徒ひとりひとりの性格を知り、個々の生徒の長所を尊重し個々に応じて誉めたり叱正したりした。

学ぶことの困難を自ら克服した人こそ、最善の教師になれると言える。ペイン校長は、古典の殿堂オクスフォードで古典語の学問を修め卒業してきたばかりであったから優れた教師であろうと期待され、その期待どおりになった。彼に非があったとすれば、それは生



徒の学力を伸ばそうとする熱心のあまり教科書をたびたび変えたことだった。そのために時には文法の基礎をしっかりと教え込むことが疎かになった。オーエン校長の場合は逆に基礎を叩き込もうとして、ジュピターの所有格が言えなかった生徒を笞で厳しく罰した。

学校の入学者台帳を付けて保存するという方法で、学校の成果を明らかにすることができる。台帳にはウォリントンで指折りの名家の殆どが名前を列ね、市外からも有力な人々の名前が出ている。ここで教育を受けさせたいと考える人々は町の内外から息子を送り、学校に対して高い評価をしていたことがうかがえる。生徒数は増加し、価値あるものを身につけた卒業生は社会で立派に役割を果たした。ペイン校長が上げた成果を逐一みてゆくことはできないが、その一部を紹介したい。

人々に善行をおこない与えられた生命を全うした卒業生のなかに、ジェームズ・マーシュがいる。ウォリントンの優秀な書記を務め、グラマースクールの歴史の執筆者で、また数々の文学作品の著作がある。彼は法律家の道に進んだが、もしケンブリッジに行っていたら、必ずや数学の優等第一級合格者になっていたであろうと言われた。1880年6月24日の彼の死でチェプストゥ城の歴史は未出版のまま残され公刊されたのは死後となった。1829年の入学者には、他に二人の著名になった人物がいた。トマス・グレイズブルック・ライランズとピーター・ライランズで、二人はいづれも故郷の町で市長の職に就いた。トマス・ライランズは実業家としても成功した。彼には文学や科学の著作もあって、知る人はみなトレミーが書いたイギリスの地理の本が彼のペンから生まれてくることを期待していた。ピーター・ライランズは幅広い知名度を持つ人で、下院議員になった。同じ一族にはトマス・カー克蘭ド・グレイズブルックがいた。文化人で、サウスポートの歴

史その他の著者であり、息子三人をこの学校に入れた。三人のうち長男はオクスフォードを卒業し、聖職についた。次男は外科医になった。三男は事業に携わった。聖書には、蒔いた種がみな豊かに実を結ぶわけではない、という喩え話があり、種蒔く人は一升の種を蒔いて、並みの収穫があればそれで満足しなければならない、と言われている。ペイン校長の働きは大いなる成功を納めて実を結んでいった。

ウィリアム・ホールは、文学を愛する人でチェシャ州とランカシャー州の二つの王権州の治安判事として尊敬されていた。彼は同じ年に二人の息子と一緒に入学させた。上のジョンはオクスフォードを卒業し、聖職資格をとり、社会に貢献する人物となることを期待されていたが、失明する不幸に遇った。下の息子は若くして亡くなった。

綿布製造業のコックショットとエスクリグは、大きな工場を所有し、ウォリントンの他の特権階級同業者たちに学校の意義を認めさせた。同業者たちは続々と子供たちをペイン校長の学校へ入れた。

ペイン校長の教え子のなかには、ニューバンクのシャルクロス・フィツハーバート・ジャクソンがいた。彼は陸軍に入り国家に奉仕して退役した後、cedant armatiga (武は文に譲るべし)の格言を実行してチェシャ州四季裁判所の所長を務め、生まれつきの法律家かと思われるほどの学識を示した。その息子はグラマー・スクールを出て実業界で大いに才能を発揮していた。そして予期せずノーサンバランドのウィザリントンを相続し、その広大な地所から名前をとって、シャルクロス・フィツハーバート・ウイドリントンと称した。相続した屋敷のなかには銀の刻印が見つかった。その銘刻の文字を解読した友人によって、14世紀の刻印であることがわかった。1388年の戦いを歌ったチェヴィ・チェ

イスの英雄のものだったのかもしれない。フリリップ・シドニー卿によれば、そのバラッドは卿の心をトランペットの響きのごとくに奮い立たせた、という<sup>10</sup>。ウィドリントンはノーサンバランドの領地に住み治安判事として活躍しカントリージェントルマンとして地元へ貢献した。

ベイン校長と前任のオーエン校長を比較すれば、両者はギリシャ人とトロイ人ほどに全く両極端であろう。オーエン校長はラテン語を中心に教え、ベイン校長はギリシャ語に力を入れた。オーエン校長は学校で使うラテン語文法の本を出版した。そしてイートン校のラテン語文法から学校の日時計に入れるモットーにNune ex praterito discus 「今は過去の廻りくるもの」を選んだ。ベイン校長は学校で使うギリシャ語文法の語形変化の本を書いた。そして学校の日時計には、福音書の教えである「光あるうちに歩め」というギリシャ語を選んだ。後にその日時計は取り払われたが、モットーの方はベイン校長を忘れない者によって元の場所に刻まれた<sup>11</sup>。

詩人のグレイはケンブリッジ大学のピーターハウスコレッジに住んでいたとき、火事を極端に恐れた。あるとき火事の警報が鳴り、窓を開けて外に出ようとしたグレイは下にあった水の樽の中に落ち、日頃の心配とはまったく別の運命に遭ったのである。そのせいか、グレイは可愛がっていた猫が死んだときに哀歌を作った。その猫の死というのは、陶器の水槽のなかで泳いでいた金魚を捉まえようと水のなかに飛び込んでの溺死であった。詩人はその哀悼の歌の終りを教訓（一歩誤ると命取り。気をつけなさい、光るものすべてが金にあらず）で締めくくっている<sup>12</sup>。

オクスフォードで古典をおさめたベイン校長にとって作詩は日常事で、読んだ詩を直ちにラテン語に書き換えることをよくしていた。グレイの猫を悼む詩をおもしろがったべ

インは、その哀歌を優雅なサッポーの詩体でラテン語に翻訳し人々を楽しませたが、その詩は残念ながら残っていない。ベイン校長の隣人にワット夫人という人があり、「クイズ」という名の犬を飼っていた。その犬が死んだとき、グレイの猫の哀歌に興を覚えたベイン校長はクイズの墓碑銘を書き、クイズの墓には次の墓碑銘がラテン語で刻まれた。

Quis jacet hoc tumulo, dixi?

誰がこの墓に入っているの？ と私は言った

Graviore reponit echo voce sonos

その言葉を木霊が重々しい声で返してくる

Quiz jacet hoc tumulo<sup>13</sup>

クイズがこの墓にはいつているの

ベイン校長は聖職資格を持っていた。しかし、前述したローストン校長時代に大法院の裁可によってこの学校では校長と教区牧師の両方を一人で兼務することはできないことになっていた。そこでベイン校長は教区教会で牧師ローストンの補佐をした。ローストンは校長職と牧師職を兼ねた最後の人であったが校長職を等閑にして牧師職を選んでいった。1832年にローストン牧師が退任するとケンブリッジのセント・ジョーンズ・コレッジ出身のホレイス・ポーズ師が牧師として着任した。ベイン校長は引き続き日曜日の教会礼拝の補佐をした。ポーズ氏はディーンにおいてガードルストーン氏の副牧師を務め、その後セント・ヘレンズ教会でピゴート氏の副牧師を務めたことがある。校長と牧師とはほぼ同年齢で良き友となり、和気あいあいと仕事をした。ただベイン校長はオクスフォード人であり、オクスフォード運動が始まるとその運動に対しては牧師よりも好意的な見方をした。

ベイン校長とポーズ牧師には初等教育を

貧しい人々の間に広げるといふ夢があった。ウォリントンにナショナル・スクールを建設し維持していくための資金集めにペイン校長の力は大きかった。このような場合、第一の課題は、学校の必要性を広く人々に理解してもらうこと、そして財布の紐を気前よくゆるめてもらうことである。これは容易なことではない。ペイン校長は多くの優れた資質を持ち、とりわけ説教者としての彼の働きが助けになった。ペイン師は声の通りが良く、説教の内容は非常に丁寧に準備してあった。説教のなかでは厳然たる真理が熱意と力とを込めて語られたため、聞いた者はそれを等閑にするようないかなる言い訳もできないものであった。

ウォリントンに初めてアジアコレラが発生したのは、1832年のことであった。マンチェスターから入り、6月18日に最初の発病が出て9月23日に終息するまでに328件の症例がみられ、169人が死亡した。この病魔に襲われた町で、人々の顔には険悪なものがついていったが、ポーズ牧師も補佐をするペイン師も死者を弔うという辛い仕事に向かって一瞬たりともたじろぐことはなかった。病は発病から死に至るまでがあまりに急で、死を前にした病人を訪ねてやる時間が間に合わない有り様であった。

グラマースクールは生徒数が増え、あらゆる階級出身の生徒と一緒に学んでいた。パブリックスクールにおいてこれは常に望まれていることで校長への強い信頼の証しになる。

ジョン・スタントン氏一家は郡の優秀な行政長官をしていた。彼は三人いた息子をみなペイン校長の学校に入れた。そのうちの一人は内科医になったが、惜しくも若くして肺結核で亡くなった。

郡の優れた治安判事、ウィガンのハリバートンもペイン校長の学校に息子を入れた。かつて、『サム・スリック』の著者ハリバート

ン判事はアメリカからウォリントンを訪れてニュートン・ル・ウィローズにある円形の建物を見学した。そこは(W.ビーモントの目撃証言によれば)オーヴィッドに比較し得る素晴らしい変容を遂げた建物だった。昔の闘鶏場が5才から7才の幼児学校に姿を変え、かつて罵声や怒声が反響した建物の中で幼い子らが人生を導いてゆく尊い教を習い、可愛い声で造物主を称えて聖歌や賛美歌を歌っていた。

社会に出て貢献した卒業生をもう少し紹介すれば、ジェイムズ・オーガスタス・ペイジは1832年に入学したとき父親と死別したばかりで、彼の将来には自分の自助努力以外にあってにできるものはなにもなかった。まだ在学していた頃から既に『散らされた木の葉』という詩集を出版し、それをグラマースクールの受託者とペイン校長に捧げた。折しもペイン校長はオクスフォード大学から教会法の学位を授与されたばかりであった<sup>14</sup>。ペイジは学校で受けた多大の恩恵に対して献辞のなかで謝意を述べている。ペイジは卒業するとダブリンのトリニティ・コレッジに入学し文学士の学位を取得した。その後チェスターの司教から聖職の叙階を受けてティントウイスルの聖職碌を与えられた。そこで牧師として熱心に活動し、寄付によって広い学校を建て、また教区の人のための作業所を建てた。1843年には、その題も『集めた木の葉』という二冊目の詩集を出版した。ペイジは女王アデレイド陛下の許可を得て、この詩集を陛下に捧げた。ティントウイスルでしばらく働いた後、彼は流暢な弁説の才能が認められ聖書協会から公式の会合に送る代理人としての依頼を受けた。会合へ出席するようになると聖職碌を諦めざるをえず、ペイジはラスホームに引退した。そして数年の後にその地で亡くなった。

ペイン校長の時代になって、年に一度、春

先から初夏にかけて生徒のために遠足の行事が始まった。その日には本を閉じ郊外に出て田舎の空気を吸い、緑の草原や森を眺め学校に戻ると新たな活力を得て翌日からまた勉強に取り掛かることができる。遠足は前もって計画を立て、生徒は遠足そのものと、期待して待つことの楽しみを二重に味わった。この遠足のアイデアは生徒の親たちの中にも賛同者が現れ、実施に必要な費用の援助を申し出て校長を助けた。ウォリントンの町ほど様々な製品、綿布、ガラス、鉄、鋼鉄、真鍮、薬品、その他、の工場があるところは他にないだろう。ここを見学を訪れるのは地元の人よりも他所からくる人たちで、わざわざ遠方から見学にきているということは、遠足で出掛けてみる価値がじゅうぶんにある。さいわい、いろいろな交通手段が利用できた。鉄道あり、川もある。この川については次のような歌がある。

マーシー川の穏やかな流れは、長い間  
知られもせず、歌にも歌われず……

マーシー川には二つの運河がある。地元ではそれを二つの「細い海」と呼んだ。その海は大波が立たないmal du mer（船酔い）をしない海である。運河と川を使い楽しい旅ができる。ペイン校長は遠足のためにオールド・キー・カナルを選んだ。旅客用の運河船に乗って、校長とその大家族とは初めての船旅に出発する。船は遊覧船のように飾られ、生徒たちは船室に入るか甲板の客になるかを自分で決めた。空は快晴で風は香しく、あるときは野原がある時は森を通して船は進んだ。自然はすべて気持良く快活だった。少年達が生き生きとして元気が出たことは想像に難くない。目指す先はランコーンとウェストンだ。ランコーンでは涌き起こる風を受けて船団が行き来する。一隻一隻の船は潮が待ってくれないことを敏感に察知し、ひとときさえ無駄にせず潮をうまく利用しようとしていた。そ

の光景は活気に満ち、見ていて楽しいものだった。ランコーンには陸の方にも見るべきものがあつた。とりわけ次々と続く運河のロック（閘門）は全長585メートルあり、マンチェスターとランコーンを同じ水位で48キロにわたって結ぶブリッジウォーター運河がここで水位を徐々に下げ、およそ27メートル下の川の水位に届く。川には、同じロックを使って逆に運河へ上がっていく船が待っていた。

運河の両岸にはいろいろな国から、また国内の遠隔地から到着した原材料が埠頭に積み上げられていた。原材料はみなこの地方の工場へ運ばれてさまざまな製品に加工される。耐火粘土はスタフォードシャーなどの磁器を製造する工場で見事な美しい器に変わる。このような見聞は生徒にとって何よりの勉強になった。

ウェストンに一行が到着する頃にはちょうど満潮時でたくさんの船がみな川口にある運河の狭いロックを利用してウィーヴァー川に入る順番を今や遅しと待っていた。ロック——すなわち運河と川とを結ぶ水位を調節するために開閉する門扉のある装置——が開くのはこの時だけなので、各船は逆らう波と風に向かって船を安定させて操縦するために舵輪にそれぞれパリニュラスを張付けて、イーノードの操舵手（パリニュラス）のような運命——眠っている間に海に落ちたという不運——に遭わず無事に船渠に入れるようにと奮闘するのが見えた。

このような光景を眺めた後で、一行はランコーンに戻るとホテルに用意してある食事を旺盛な食欲で平らげた。寛容にして英雄的なタルボットがオーヴェルニュの伯爵夫人に告げた言葉というのは、この時の少年たちについてもあてはまる。

私がひたすらもとめることは、ただ  
あなたの食物を我々に味わわせてもらう

こと

兵士たちの胃袋は、それにじゅうぶん役立ちますから

食事が終ると一行はまた船に乗り楽しい一日の終りを家路についた。遠足は事故も間違いもなく無事に終わった。翌日、生徒たちは遠足の作文を書き、一番良い作文には賞が与えられた。

ベイン校長の指導でなにか弱いところがあるとすれば、それは作文であった。13才のある少年は金釘流の非常に変形した文字を書いた。ギリシャ文字で文を書き過ぎたせいだが、そういう理由でもなかったら、校長を誉める人は誰もいなかっただろう。

前校長ボードマンには生涯を保証して多額の年金がベイン校長の受けとる年俸から支払われていた。そのためベイン校長は楽ではなかったと思われる。幸い校長の信望と、知名度の高い学校に遠近を問わずゆとりのある人々が息子を寄宿生として入学させてきた。寄宿生たちは校長の家に住み<sup>15</sup>、校長夫人の保護のもとに家庭の憩いを味わうことができた(当時の寄宿制の学校では、一部の生徒は寄宿舎とは別に少し余分の費用を出して校長の家に寄宿することができた。ドジスンもリッチモンド・スクールでは、ジェイムズ・テイト校長宅に寄宿して他の数名の生徒と共に家族のような待遇を受けた)。このような寄宿生のなかに、ジョリフィーズ兄弟、ブランドル・ホルンズヘッド兄弟、フロードン出身のジャクソン兄弟がいた。エドワード・ジャクソンはヘレフォードシャで聖職につきその職責を果たして、スラクストンの教区牧師となり、そこで歿した。トマス・ヘンリー・ライアンは中華戦争の功労で特別に海軍元帥から報賞を受けた。彼はウォリントンに近いアブルトン・ホールに住み、ウォリントンの町の良き隣人であった。ローストーンがいた。ライアンズは三人いた。プルフォードの教区

牧師の息子もいた。マンチェスター・バーリ一家からもこの学校に入っている。

今挙げた名前はほんの一部にすぎないが、これだけでも学校の評判がウォリントンの町だけに止まらなかったことがわかる。さらにウォリントン出身の生徒の名前を挙げれば、ベイン校長の時代は町における学校の信頼が大であったこと、また校長の教育が生徒達の将来において豊かに実を結んでいったことがわかる。まず、ピーター・スタブズとジェイムズ・マースンがいる。二人とも町では重鎮の治安判事になった。トマス・リットンは実業家として成功した。彼はウォリントンのライフル部隊の司令官になり、市議会議員になった。市長をしたことのあるチャンドリー、それからピックミアは市長職を四期務めた。市民の信望が高いロバート・ディヴィーズ。弟のトマス・ディヴィーズは科学者で、科学の書物を数冊執筆したが、惜しくも早世した。ウィリアム・ディヴィーズは文学に進み、文筆活動で名を成した。ヘンリー・シャープ師はエリーの教会監督でスウェィヴシーの牧師になった。ケンブリッジ大学のジーザス・コレッジで1853年に数学優等試験第一級に合格し、牧師として生涯を送った。

ウィリアム・ジョン・ピーモント師は1828年1月26日に生まれ、1832年-45年にベイン校長の生徒であった。42年にイートン校へ進み、46年まで同校に在学して、近代言語の部門でアルバート殿下賞を、古典語部門ではニューカッスル賞を受賞した。イートン校からケンブリッジのトリニティ・コレッジに進み、数学と古典の優等卒業試験の両方で優等の学位と総長の金メダルを授与され、1852年にはトリニティ・コレッジのフェローに選ばれ、1854年には聖職資格を取り、イェルサレムに行き、そこでアビシニアへ宣教に行く人々のための臨時教育機関の責任者となった。クリミア半島南端部でロシア海軍

の基地があるセバストポリでの戦いまでは陸軍野戦病院で無償のチャプレンとしても働いた。1856年に故国に戻りロンドンのドゥルリー・レインにあるセント・ジョン教会の副牧師になり、教区に学校を建設するために尽力した。そのときアルバート殿下はイートン校とケンブリッジにおける殿下の良きこの学生のことを覚えていて、多額の寄付を寄せられた。1858年にケンブリッジにあるセント・マイケル教会の牧師職を受けたビーモンはKing's preacherであったために、大学教授職を併せ持つことができた。セント・マイケル教会でもロンドンと同様にひたむきに神のために働いた。1868年、40才で生涯を捧げた神によって永遠の安らぎへと召された。息子に先立たれた老ビーモンは、次のラテン語を記している。Obdormivit in Christo et muldis ille bonis dehilis occidit! (病弱なる彼は、キリストにありて眠りにつき、多くの善行を残して死せり。)

## VI おわりに

1842年、ベインは校長を辞することを希望して、ウォリントン・グラマー・スクールの受託者と町の人々に惜しまれながら学校を去った。チャールズの父ドジスン牧師がダーズベリからクロフトへの転任の知らせを受けたのは、翌1843年の1月13日付けの首相ピールからの手紙であった。教会の仕事を選んだベイン師は、ランカスターにあるプロトンのセント・ジョン教会(図p.28)の牧師職を受けた。それから6年後の1848年12月22日、トマス・ヴィア・ベイン師はプロトンの牧師館で世を去った。45才であった。息子のトマス・ヴィア・ベインはこのとき18才、チャールズ・ドジスンとオクスフォードのクライスト・チャーチで再会する3年前のこと

である。ベイン校長を惜しんだ老ウィリアム・ビーモンは「ウォリントン・グラマー・スクールの校長たち」のベイン校長の項で終りにラテン語の次のことばを記している。Praesertim patri maestisaimo superstiti. (とりわけ、息子に先立たれ悲嘆にくれた父親にとって、その死は痛ましいものなり)。

チャールズ・ドジスンの日記には一度も言及が見られないトマス・ヴィア・ベイン師について、以上のことが明らかになった。

## Acknowledgments

The writer wishes to acknowledge the help and encouragement she has received from the following: Ms Anne Amor, Ms Hilery Chambers, Mr Chris Heather, Mr Takayuki Kasai, Mr Kenji Makita, Ms Janet McMullin, Prof. Matsuji Tajima, Ms Kathleen Tilsley.

The Plates reproduced at the end of the paper were taken and supplied by Mr Keith Wright. 本稿は次の方々にお世話になりました。ウォリントン図書館の古文書担当官ヒラリー・チェインバーズ女史、サー・トマス・ボタラー国教会高等学校図書館員キャスリーン・ティルズリー氏、クライスト・チャーチ図書館のジャネット・マクマラン女史、元大英図書館員牧田健史氏、サレーのパブリック・レコード・センターのクリス・ヘザー氏、以上の方々に資料検索でお世話になりました。ベインの墓碑の写真はノースウィッチのキース・ライト氏が撮影した写真を提供していただきました。

ラテン語の解説に関しては九州大学大学院言語文化研究院の田島松二教授にお世話になりました。ここに記して感謝致します。

参考文献

Beamont, William, *Masters of The Warrington Grammar School*. Warrington Guardian, November 1883.

Clark, Anne, *Lewis Carroll: A Biography*, 1979.

Lewis, Samuel, *A Topographical Dictionary of England*, 1848, reprinted 1995.

Lievesley, H. *Boteler Grammar School, Warrington, 1526-1926*, 1976.

MSS of *Journals*, Charles Lutwidge Dodgson No. 54341-54346 Microfilms from the British Library.

<sup>1</sup> クロフトにおけるドジスン牧師とその家族については、「チャールズ・ドジスン牧師と聖ペテロ教会」英米学研究第34号に書いた。

<sup>2</sup> 日記ではMrs. Bayne

<sup>3</sup> Read the morning service (my first time) and Bayne preached. He and Mrs. Bayne have been here since the 24<sup>th</sup>.

<sup>4</sup> An eventful day. .... I went with Mrs. Bayne etc. to the Theatre and afterwards went off myself to the Bazaar.

<sup>5</sup> 1866年6月13日のドジスンの日記は、..... in the evening with Blore, Mrs. Bayne and the Misses Allen to the St. Johns' private theatricals, given in the Music-Room Holywell...

<sup>6</sup> Bayne and Mrs. Bayne came on a visit to the Chestnuts.

<sup>7</sup> Sir Thomas Boteler, Church of England High School

<sup>8</sup> King's Preacher について、サレーのパブリック・レコード・オフィスのクリス・ヘザー氏によれば、「名誉な肩書き、公式の場で国王に代わって福音を説教する立場の人

物で、おそらく英国の各郡にそれぞれこの肩書きを持つ複数の人がいたと推測される」、との見方を個人的に示めされた。

<sup>9</sup> Anne Clark, *Lewis Carroll, A Biography.*, 1979.

<sup>10</sup> Then stepp'd a gallant squire forth,  
Witherington was his name,  
Who said I would not have it told  
To Henry our king for shame.  
That e'er my captain fought on foot  
And I stood looking on,  
You be two earls, said Witherington,  
And I a squire alone.  
I'll do the best that do I may  
While I have strength to stand,  
While I have power to wield my sword  
I'll fight with heart and hand.

<sup>11</sup> ベイン校長を忘れないもの、とは、W.ビーモントのこと。

<sup>12</sup> From hence, ye beauties undeceived,  
Know one false step is ne'er retrieved,  
And be with caution bold,  
Not all that tempts your wondering eyes  
And heedless heart is lawful prize,  
Nor all that glitters gold!

<sup>13</sup> ラテン語の「誰が」Quis (クイス) と犬の名前のQuiz (クイズ) の音の遊び。

<sup>14</sup> Bachelor of Cannon Law

<sup>15</sup> サー・ウィリアム・ビーモントが書いた句はProesertim patri moestisaimo superstiti. であるが、proesertim およびmoestisaimoのなかの -oe- は、通常-ae-と綴るといふ、田島松二教授より御指摘をいただいた。



St. John's Church, Broughton and Thomas Vere Bayne senior's grave there